

水の
駅

太田
省吾

ここに〈記録としての台本〉として記したものと、稽古に入る前に提出した台本とはまったく様相のちがうものである。この三部作の第一作「水の駅」の構想では、沈黙したまま演じること、そしてそれを人間の生きた時間とする方法として、きわめて遅いテンポで演じることが試みようとしていた。成算に何の保証もない冒険だったが、舞台にぽつんと立っている水道を思いついた時、わずかにこの構想を現実化できる目処が立ったように思えた。

舞台の中央に、把手の壊れた水道。その蛇口から糸のように細く流れつづける水と水の音。そして、その水場に通りがかり、近寄り、水に触れ、やがてどこへともなく去っていくさまざまな人々のさまざまな貌。この構成の中では、沈黙が単に形式としてでなく、人間の生きる時間として呼吸するものになるようにおもえたのだった。

しかし、そこから先、つまり一つ一つのシーンを現実化するためどういう台本を書けばよいのかは見当がつかなかった。台本にしようと筆を執ると、沈黙が形式化しそうに思えた。沈黙という形式によって言葉を演じるものになる。かといって、具体化のためのなんの枠なしではどうにもならぬ。私は結局、大雑把な行動の指示を資料(1)として記し、資料(2)、資料(3)として、詩の引用や小説、戯曲、絵の引用をして、登場人物の行動や意識を間接的に限定することにした。直接形で書くことはできなかつた。

稽古の入口は、そのようにして構成されたものを台本としてはじめられた。そこから表現される演技は、台本をどう表現するかではありえず、台本の一応の枠、限定を発端にして引用していくものだった。

引出されたもの、その表現そのものだけが稽古での検討の対象だった。そこから殺ぐものを殺ぎ、生きるものを生かしていく。その検討を繰返しているうちに、〈資料〉は意味を失い、跡を消していった。間接的な限定によって、具体化のための発端を手にし、演技の現場でまったく別の直接性を生んでいくという過程だったと思う。

生きた沈黙を演じたかったのは、人間の〈要約できない〉領域を演じたかったということであり、そこへ踏みこむためには、こんな不安定でややこしい過程が必要であり、こういうやり方しかなかったのではないかと思う。〈台本〉として提出することは、構造的に不可能だということである。したがって、ここで記すことのできるのも、稽古で複雑に検討を加えた、結果としての行動であり、その外面的記録としての台本だということになる。

もう一言つけ加えれば、構成は私であるが、ここにまったく触れられていない、その行動、言動として書けない内容は、稽古の中で形成された演出と俳優のものである。

なお、これらの劇の基本テンポは、二メートルを五分で歩くほどのものとなった。

登場人物

少女

男 a

男 b

女

妻

夫

老婆

列の人々

男と女

大きな荷物の男

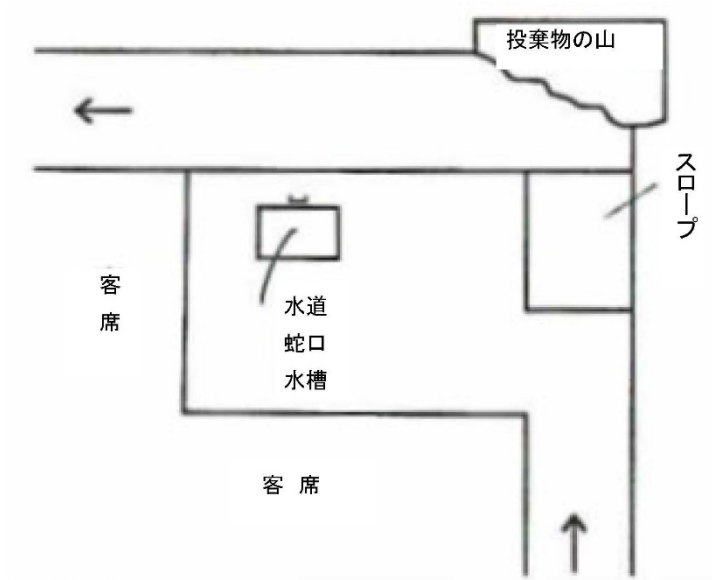
【舞台】
把手の壊れた水道。そこから細く流れつづけている水。水を受けている水槽。
舞台奥には、ここを通りすぎていった無数の人々の捨てていった古靴。そして下着、
自転車、鳥籠など投棄物の堆積した黒い山。

場面ⅠA

少女 scene1

少女が
一人
薄い光の中
バスケットを手に
歩いてくる
小さな坂の途中
少女の足が ふと止る
歩いている 少女の背中
歩いている 少女の背中
ねじれる首
やってくる道へ
遠いひろがりへ 向く顔

場面ⅠB



演出指定

まだるい観客席。水音
席に着いた観客の目に、少女。

水音・音楽

水音

暗くなつていく観客席
舞台には、少女の姿と、遠く距
たつて細く立っている水道の影。
上手前から舞台奥へ向こう途中の
スロープ。

遠いひろがりから 目が足元へ
そして、進行方向へ

歩く

少女の横顔

歩く横顔の

唇に指先

止る足 水場へ向く顔

細く流れる水

細く鳴る本音

水場へおりのる 少女の足

水のとなりに

腰をおろし バasketを膝へ

少女の目に風が通る

少女の手に Basketから赤いコップ

細い水の筋に 差し出される

赤いコップ

透明の線が

赤いコップに消える

舞台上手奥、投棄物の山の手前か
ら、下手の方へ。

照明、しだいに明るさを加え、舞
台は、〈長い道〉から〈ここ〉へと、
変貌していく。

幕開き前から聞こえつつづけていた水
音が切れ、無音。

←

見つめる 目の中
赤いコップに 満ちていく水

水の筋をはなれる赤いコップ
少女の口へ

水を飲む少女

体内を流れていく水

飲みほす 少女の目に空

バスケットへ のぼす手が止る
少女の目 やってきた道の方へ

二人の男 scene 2

やってきた方角へ

遠く目をやる 二人の男

男aの目

遠くはなれ 進行方向へ

男aの耳に 水の音

男bの目 遠くへ

水へ引よせられる 男a

男aの指先に 水の筋

男が二人
やってくる

二人の様子を
うかがう少女

水辺から

はなれていく少女

投棄物の山へ 身をひそめて
男を覗く少女

二人の

音楽——エリック・サティ〈三つ
のジムノペディ〉第一番。
(ピアノ高橋アキ)
コップから湧くように、低く

古い背広を着、男aは、布団を背
負い、男bは、旅行鞆を手に。

男a、舞台上手奥の方向へ。

男a、舞台上手前から最短距離で。

男bの目に 水場へ腰をおろす男a

男b 水場へ
男aの両手に 水の筋

男aの喉へ 流れこむ水

男bの手 水の筋へ
味わう口

蛇口へ口をつけ 水を吸う男b

男aの耳に 水を吸う音
〈ズズズズ〉

見合う二人

蛇口を見つめる 二人の男

男a 口を蛇口へ
〈ズズズズ〉

あいた蛇口

口を近づける男b

飲み足らぬ男aの口 蛇口を奪う

あいた蛇口

口を近づける男b

まだ飲み足らぬ男aの口 蛇口へ近づき

二人の口が 蛇口でぶつかる
接吻の態勢で 奪い合う細い水

二人の行動へ
目を注ぐ少女

立ち上がる少女

←----- (断続的に) ----->

二人の口 蛇口からはなれ
見合う二人の男

二人の顔 空へ

男bの指 水の筋へ 指先の水 頬へ
男aの指 水の筋へ 指先の水 頬へ

空へ向いている
二人の顔

男bの顔 男aへ

男bの目に少女

男aの顔 男bへ

男bの目に少女

二人の男の目

少女を追う

遠くはなれた 少女から 目をはなし

荷物を取りあげ 立ち上がる

二人の男

二人の目に

遠いひろがり

遠いひろがりへ 目をこらす

二人の男

先の道へ首をまわす男b

水道へ目をおろす男a

二人の様子を うかがい 近よっていく

後ろから二人の顔を 覗こうとする
少女の かしいだ顔

男の目にぶつかり
後ずさる少女

二人の目に
押される少女

遠くから二人の目の先を
うかがう少女

男たち、水場に腰をおろしたまま。

少女、舞台上手奥、投棄物の山の麓まで。

音楽——同前 発っていく男たちの歩調と同様に低く。

発っていく
二人の男

日傘を持つ女 scene 3

重たくまげられた首

女の重たい目

やってきた道から ふらりと空^{くう}へ

空を歩む女

空を歩む 女の手

身体を這いあがる

乳房から首 首から唇へ

女の足が

開く日傘と 同時に止る

乱れた素足がふたたび

地面をつたう

女の足が止る

日傘を抱えこみ 身を縮めていく女

女の耳に

見送る少女

男たちを見送った

少女の目が あたりへ投げられる

少女の目の中に一人の女

少女の 女から離そうとする目が
離れない

女、舞台手前を上手から下手へ横
切っていく。

女、舞台前、下手端へ。

女、舞台前、中央の方へ。

女、舞台前、中央。

水に引かれる女
水辺にかがむ

揺れる水面
砕かれる顔を 覗きこむ女

蛇口へ 近付ける口に

細い水の筋
女の身体に水が流れこむ

女の目が開く

女の首 ねじられ
自分を覗く目へ

覗く目へ寄っていく 女の黒い目

覗く目を追いつめる女

覗く目の顔をうかがう女
弛む目

少女から目をはなす 女の目に
人影

近づく人影を ながめる

女の顔に笑みと 歪み

女の顔

女の黒い目に押され
山を這いあがる少女

叫ぶ少女の

開いた口 見聞いた目

乳母車を引いた夫婦

少女の口が

閉じていく

女を避ける 少女の足

少女、山の上で。

音楽——同前。声を消す高さで。

音楽——低くなる。

女、舞台を上手奥から下手前へ横
切る。

女、舞台下手奥へ。

女の足 先の道へ

夫婦 SCENE 4

一本のロープ

結びついている

歩む夫と 乳母車と 歩む妻

水場で立ち止る

夫の顔

妻をふり返る

遠くで 水にとどまった

妻の目が動かない

夫の手 ロープを引く

妻の身体小さく揺れて

目が 水から夫へ

水場へ 乳母車を押す妻

ロープをたぐる夫

乳母車から

水筒をとりだす妻

女を避ける 少女の足

道の先の方へ

投棄物の山から 男の子があらわれ
投棄物の山から 歯ブラシをつかむ

投棄物の中から 這い出す
ムギワラ帽 男の身体

荷物を乗せた乳母車 上手奥へ

上手奥から下手へ

妻、山の麓

二人 水場へ

妻 水筒を水の筋へ
腰をおろした夫の目 遠くへ

水筒へ 口をつける妻
顔がゆるく空へ

夫の手
水を飲む妻の脚へ

妻の顔
空から地上へ

夫のとなりへ 腰をおろす妻
水筒を夫へ

夫の喉へ
流れこむ水

細い水の筋をながめる二人

水筒を手に 立っていく夫
水の筋を見つづける妻

先の道へ目を投げる夫
水場に立つ妻

妻をふり返る夫
かがむ妻

スカートの裾へ 手をのばす妻
スカートの下から

歯みがき
あたりを観る目

背後から
二人へ遠く 向けられる
男の目

山の上で
新聞をひろげる男

新聞をひろい読み しながら
二人を観る男

白い腰巻がおちる

腰巻を地面に ひろげ
妻 素足をのせる

見つめる夫

白いひろがりに坐る妻
コートと靴を脱ぐ夫

白いひろがりの上
並ぶ 二人の身体

妻の手に触れる夫

夫の手を引きよせる妻
引きよせた夫の手で
身体に触れる妻
乳 腹 脚

白い布の上
二人の身が混じる

ほどける身体
妻の身体を引きよせる夫
夫の身体に手を置く妻

交わらない目
それぞれの方角へ 遠く開かれる

新聞から目を
離す男

二人を山の上から
ながめる男

頬づえの中から
二人へ目を向ける男

老婆へ
目をやる男

老婆がやってくる。
老婆の目に二つの身体

舞台中央。

音楽——同前。

音楽——低くなる。

←

←

目に
気づく夫と妻

皺よった白い布の上に 立つ夫

腰巻をたぐりよせる妻

見合う妻と老婆
コートを着る夫

互いに一歩ずつ 近より

見合う
二人の女

老婆から目をはなし 乳母車へ近づく妻

見合う夫と妻

ロープを引く夫
乳母車を押す妻

歩む夫 乳母車 歩む妻

老婆 scene 5

水場にしゃがむ老婆

老婆へ 老婆がやってくる

目をやる男

老婆の目に二つの身体
二人の目差を
受ける老婆

山の上から
二人の女へ

目を投げる男

水へ向って 身体を近づけていく老婆

投築物の山上から 二人を
見送る男

観る男の目
二人から老婆へ

杖がわりに傘をついて。片方の足に思い出のハイヒール。背に赤ん坊をいれるほどの

指先を水の筋へ

水の筋から

濡れた指先へ 移動する老婆の目

濡れた指先が

唇を濡らす

指先を吸う 老婆の口

背中の籠を 抱きよせ 傍らに置く老婆

移動する 老婆の目 籠から あたりへ

遠い向こうへ 空へ

空の下に立つ老婆

片足に着けていたハイヒール

脱いで 足を籠の中へ

折りまげた 身体を

沈めていく老婆

籠の中の 小さなかたまり

時をたどる

小さなかたまりの中で

開く老婆の目

片方の ハイヒールが 投げ棄てられる

動きの止った

男の手に望遠鏡

望遠鏡を 目に当てた男の

目がひろく 遠くへ

望遠鏡をはずした

男の目に老婆

大ききの籠。

籠の中の小さなかたまりの中で

小さなかたまりの中で

開いた口から 吐息がもれる

開いた目が 遠くへ

遠い目が 閉じ

呼吸が閉じる

頭が

小さなかたまりの中へ

まぎれる

列の人々 scene 6

列になって

歩く

多くの人影が やってくる

山の上に立つ

男を見つける 乾し物 (洗濯物) の娘たち

男の視線に沿って

遠くから 老婆を覗く

遠くから老婆を覗く
男

覗く目を
老婆から離す男

遠くを覗る男の目に
多くの人影
そしてその向こうに
小さく街

音楽—アルビノーニへオーボエ
協奏曲。低く。

それぞれ、旅の荷物を持って。
三人の娘、歩きながら洗濯物を干
すべく、洗濯物をつるしてたロー
プを引っ張りながら。
音楽——人々の影の数にしたがっ
て高くなっていく。

目を やってきた道の 向こうへ

さらに
遠くへ目を投げ 山を登る娘たち

山の上の
娘たちの目に沿って ふり返る夫婦
みんなの目に沿って 山にとりつき
遠くへ 目を泳がす若い男たち

目の先に遠い
小さな 街

街が 彼らの目の向こうで
揺れる

手をのべるように 叫びかけるように
声をあげる 人々の口

口を
閉じてく
人々の目に
老婆の屍

若い男が二人
籠を持ちあげる

山の麓へ
運ばれる籠

山の上から
籠を見送る
娘たちの目に
水

鎮まった目を
街へ遠く向ける
男

目を遠くから
離さない男

水に向こう若い女
脚に水をすべらせ
水槽へ足をつけ 息をつく
若い女

音楽——人々の声を消す高さに。

妻、舞台前面へ
遠い街へ
目に近づける

遠い街へ
目を近づける
妻の口
再び大きく開く

閉じない口
口を開く妻の頬に
夫の平手

口を開いて
夫へ目を向ける妻
目を凝らす
二人の目

水道へ
コップを差し出す夫

コップの水を運ぶ夫
コップの水を
受け取る妻
水を飲む妻
見る夫

鎮まった目を
夫へ向ける妻

水道へもどる夫
水を飲みほす妻

乾し物を揚げ
水に近づくと娘たち

蛇口へ
争って
口をつける娘たち

水に触れ
水を含んで
身体をひろげる
娘たち

笑みの湧いた
顔で
見合う娘たち

揺れる
乾し物を揚げ
先の道へ

街が甦り
水を出る若い女

籠を埋め
それぞれに動く 人々
をながめる二人の男

目を 街へ投げながら
脚を拭う若い女
目から 街を捨て
発っていく 若い女
水へ近づくと男b
立ちつづける男a
娘たちの足元
水槽に
顔を つっこむ男b

水から顔をあげる男b
水へ近づくと男a

多くの人々の
それぞれの
動きと呼吸を
山の上から
遠く観る男
水槽の水へ
顔を近づける男a
再び顔を水へつける男b
水から男bの髪をつかみ
顔を引あげる男a

あいた水へ
顔を つっこむ男a

音楽——同前。平手打ちの高さで。

水場へ腰をおろす夫

水の筋を
見つめる夫

顔を濡らし
息をもらす夫の目に
遠い空

立ちあがる妻

顔を拭う夫へ
目を向ける妻

水場から
腰をあげる夫
列のあとを追う
夫婦

男と女 scene 7

二人が
身体を接するようにして
やってくる

男の耳に水音
歩みつづける女

遠くから
水をながめる男

〈夫〉に水場をゆずる男 a

顔の水を拭い
息をつく男 b

発つ男 b

〈夫婦〉へ目をやる男 a

先の道へ歩み出す男 a

投棄物の山の上
多ぜいの人々の背を
見送る男

投棄物の山から

遠くの水へ身を
のりだす男の目の端に
人影

身体をふたたび
投棄物の中へ
うずめる男

音楽——去っていく人々の数に
見合って低くなっていく。

歩きつづける女

女の耳に水音

ふりむく女の目に 距たっている男

水に近づく女

女に近づく男

水場に腰をおろし

水音と 水の筋に

目を向ける男と女

腰をあげ

水の筋へ指を のばす女

水の過去が

それぞれの目を 通る

男へ身体を

近づける女

女の背が 腰をおろした男の胸へ

接して腰をおろす二人

女の指が 背後の男をたどる

顔の輪郭 肌の硬さ 鼻の隆起

水へ向けた

男の手が コートのボタンへ

二人を 遠く
見おろす男

男の裸が 水槽へ 水の中へ
水辺の女の スカートを落ちる

薄衣の女 水に足を
男の顔をつたう水の筋

男の身体と 女の身体が
水の中で入れ替る

女の頬をつたう水の筋

女の背後から
男の身体が 女に触れる

女の手と頬が 男の胸をつたう
男の手が 女の身体をつたう

水の中で
二人の身体が混じる

水槽の中で
二人の動きが止まる

水槽を這い出る
女の顔が歪む

小さな水槽の中で 女へ目をやる男

遠くへ 口を開く女
目をふさぐ男の手

山の上の目
二人の動きを追う

大きな荷物を背負った
男がやってくる
二人を観る 男の目に
大きな荷物の男 男の目に
男と女の身体

二人に目を向けながら
山へ向かう男

近づいてくる
男から 身を隠し
投棄物の山の中へ
身をうずめる男
投棄物の山に登り
物色

水槽から舞台前面へ。

音楽——声を消す高さで。へジム

ふりほどく女
口を開く女

背後から目をやる男

背後の男へ しがみつく女
受けとめる 男の顔が歪む
二人の身体から したたる水

しがみつく女の

身体が地におろされ

地にしゃがむ女と

女を抱く男

濡れた二人の

身体がゆるく混る

水へ ねじられる男の首

空へ 仰向けられる女の首

男の身体

女からはなれる

空の下
の女

服を着ける男

スカートへ手をのばす女

見合った二人が 荷物へ移る

荷物を手に

発っていく二人

山をおりる男の目に
二人の身体

投棄物の山を下り
発っていく二人を
遠く 見送る
男の手に古靴の片方

ノペデイ

音楽——低くなる。

大きな荷物の男 scene 8

大きな荷物と

いっしょに 腰をおろす男

右足の靴を 脱ぎ

捨てる男

山から拾った 靴と履き替え

吐息混りの目を 遠くへ

ふらりと戻った

目がカセットレコーダーへ

カセットが 音を出す

音楽に 力を得た足どりで

水場へ

大きな荷物と

いっしょに 水場へしゃがむ男

後ろ手に 大きな荷物から

とり出される

歯ブラシとチューブ

音楽に 力を得た手つきで

歯をみがき 顔を洗う男

カセットの 音が切れた 空気の中

少女の身体が
薄い光の中に

身体の堆積の倍ほどの荷物。
しだいに暗くなっていく空気に、
水道の影と大きな荷物の男。
山の麓。

音楽

TOKYO
〈トキオ〉

大きな荷物と
いっしょに　しゃがんでいる男

水から目を　はなした男が
大きな荷物と
いっしょに　立ち上がる

先の道へ　向けた顔が
ふらりとふり返る

目の向こうに
人影が一人

大きな荷物と
いっしょに　発っていく男

少女 scene 9

小さな坂の途中
少女の足が　ふと止る

ねじれる音
やってきた道へ
薄いひろがりへ　向く顔

遠いひろがりから　目が足元へ
そして、進行方向へ

歩く
少女の横顔

一人
歩く少女の背中

音楽——アルビノーニ〈オーボエ
協奏曲〉。少女の歩調と同様に低
く。

歩く 横顔の
唇に指先

止る足 水場へ 向く顔

細く流れる水

細く鳴る水音
水場へおりの 少女の足

少女、闇の中へ。水の音が残る。

